

A silhouette of a person sitting on a rock by the water, with Japanese text overlaid. The person is facing left, and the background is a bright, hazy sky over water. The text is in white, with the first line at the top and the second line below it.

灼熱の夏にお前と汗ばむ

肌をあわせて乱れたい

俺とコースケは、高校で同じクラスになってからのゲーム仲間。

とくにスキキライなく、ジャンルも問わず、良作を発掘、プレイしたいとのゲームに対しての姿勢が似ていたこともあり、はじめから意気投合。

欲しいソフトをリストアップし、重ならないように買ってプレイしては感想や批評を伝え、高評価なら貸してもらって自分もプレイ。という、つきあいをつつけていた。

いや、本当なら二人で肩を並べてプレイしたかったが、俺は卓球部、

コースケは陸上部と、ゲーム以外の活動、勉強にも勤しみ、忙しい合間にゲームを嗜んでいたし。

「いくらゲーム愛があっても、いや、真に愛しているからこそ『ゲームばっかして』と呆れられて、ゲームが悪者、社会の悪と見なされるのを避けねば」と肝に銘じる点も二人共通。

周りにけちをつけられないよう学生の本分を果たしつつ、節度を持ってゲーム愛を貫いていたのが、まあ、欲求不満がないでもなく。

本来ならゲーム三昧ができる夏休みも、部活動の過密スケジュールでむしろ、プレイ時間は減少。

のはずが、今年はひどく夏風邪が流行り、その原因究明が中々されない状況で、部活動をするのも大会を催すのも危険とのことで、すべて中止。

「三年にとっては最後の夏なのになあ」と部員たちと嘆きながらも、脳内は小躍りしてヒヤッハー!

夏休みに入る前の夜から宿題や課題に取りかかり、三日でコースケと突貫工事の勢いで済ませるという。

で、四日目からゲームパーティー夏休みスタート。

親が共働きの帰りが遅いというコースケと朝早くから夕方までゲーム沼にどっぷり。

生まれてこの方、これほど至極の贅沢を堪能したことはなく、いつもの義務や制限から解き放たれ、ゲームにのりこめる至福だった。なかった。

とはいえ、自堕落にはなりきらず。

コースケの母親に頼まれた家事、掃除や洗濯の取りいれ、片づけなどをして、昼食は二人で自炊したり。

自炊については、二人とも料理初心者ながら、すこしでも節約してソフトを買いたいために、はじめたこと。



カナリアになりたい彼を鳴かせたい

今はまっているのは、「カナリア」のチャンネルの動画を、暇さえあれば、見ること。

いや、正確には、「聞く」か。

カナリアの動画の映像は、雲が流れる空や、星が瞬く夜空、波が寄せ
る海など、ループしているような、代わり映えのない景色。

メインは音声のほうで、○イーン少年合唱団の一員のような美声で、
小学校で習った童謡や唱歌が歌われる。

一番人氣が「エーデルワイス」。

他は「花」「おぼろ月夜」「春の小川」「我は海の子」「夏の思い出」「翼をください」「赤とんぼ」「紅葉」「荒城の月」など、古めかしいものばかり。

なにせ、○イーン少年合唱団並の美声とあつて「かたつむり」や「さくらさくら」を聞いても、こみ上げてくるものがあるし、国家を歌われようものなら、感涙必至。

はじめは、童謡や唱歌に馴染みのある、ご高齢の間でブームになっていたのが、徐々に支持する年齢層は下がっていき、今や、現役小学生のファンもいる。

アイドルの歌も教科書に載るようになって、その分、童謡や唱歌を習わなくなつた、小学生や、高校生の俺ら若い世代にすれば、むしろ、「だ

さい」とされるメロディーに耳が飢えているのかもしれない。

まあ、俺は歌の種類がどうこうより、声に一目惚れならぬ、一耳惚れして、聞いていて、うっとりしつつ、鼻息も荒くなるというか。

元々、声フェチではなかったはずが、カナリアの動画を聞くようになって、基本、女への興味を失った。



太陽がひまわりに恋をしました

俺の名前は大洋。

漢字は違えど、名の通り、太陽のように華やかな存在感があり、万人を照らすように明朗闊達な男だ。

もちろん人望がありつつ「元気の押し売り」「地球温暖化の元凶」と鬱陶しがられることもあがるが、太陽よろしく眩いオーラを放つ俺に、見入らない人はいない。

はずが、中学のころのあだ名「ひまわり」、彼だけは頑なにそっぽを向いている。

小中と同校出身で、顔見知りのひまわりくんは、中学までは、むしろ俺をガン見していた。

目の届くところにいれば、反射のようにロックオンをして、授業中だろうが、トイレ中だろうが、着替え中だろうが、少しも余所見をしない。

「太陽にひたすら真正面を向けつづける、一途なひまわりみたいだ」と茶化されたことから「ひまわり」と命名されたわけだ。

にしても、どうして、俺に目を釘付けにしているかというところ「自分でも、よく分からない」と彼自身、不思議そうに首をかしげたもので。

まあ、俺は太陽規模に心の広い男だから、ストーカー並の熱視線を注がれても「苦しゅうない」と鷹揚なまま、彼のさせたいようにさせた。

太陽と見まがうような、輝かしい俺の魅力は、人を狂わせるレベルに神々しいのだと、ひまわりくんが証明してくれているようで、満更でなかったし。

その後も、まるで、ひまわりが足を生やして、どこまでも太陽を追うように俺と同じ高校に入った彼は、でも、せっかく、同じクラスになったというに、一転、ガン無視。

あまりの豹変ぶりに、つい焦ったように「ど、どど、どうして」と聞いたら「かまうな、放っておいてくれ」とにべもなく。

顔を背けるだけでなく、話しかけず、近寄らず、廊下で遠目に見えて、このまま歩いていけば、すれちがうとなれば、引き返すか、横道に入るか。

授業でグループになりそうなときは、サボったり。

鳴く蛍と泣かない蝉の
幽玄な夜の交わり



俺のクラスには、仏木（ほたぎ）と世見栄（せみえ）がいる。
通称は「ホタル」と「セミ」だ。

世見栄ことセミは、クラスのムードメーカーのお調子者。
いつも、やかましく、おちゃらけ、巧みにギターの音を奏でながら、
そぐわない、音痴ぶりをお披露目し、皆を笑わせている。

これまた、ピンクの髪にピアスをしたチャラ男にそぐわず、趣味が渋くて、教室の真ん中でギターをかき鳴らし、熱唱するのは、八十年代のフォークソングや歌謡曲。

この時代のメロディーは手堅いものが多く、高い歌唱力を持つ人でも、

音程をとらえるのが難しい。

音痴など、お呼びではなかったが、音程が外れてもまわらず、恥ずかしげもなく、声を張って歌われては、まさに〇ヤイアンのソロリサイタル。

ただ、騒々しくても、耳障りではなく、調子外れなのを皆は面白がったし、セミの趣味に感化されて、すっかり八十年代の歌事情に詳しくなった。

そんなクラスの全員を巻きこんだ、〇ヤイアンの昭和メドレーリサイタルに混じらない生徒が一人、いる。それが仏木ことホタルだ。

セミとは対照的に、教室の隅っこにいて、息を潜めているタイプ。ただ、根暗でとっつきにくいというより、まさにホタルのように、容姿やふるまいが儂げで、どこか恐れ多く近寄りがたかった。

器量よしで、頭をよければ、運動や美術などなんでもこなし、といって鼻にかけず、人一倍礼儀正しい。

独特の雰囲気を持ちながらも、気は優しくそうだったから、親しくできないことも、なさそうなものを、ホタルは誰とも接しようとせず、誰も関わろうともしない。

噂があるからだ。

三年の先輩の夜遊びに連れ回されていると。

マニキュアを
塗った



先輩
の爪が男の
髪をかき乱す

俺の通う大学は、文系と理系の棟が近くにあった。

ので、理系の研究室から、警報が鳴ったり、爆発音がしたり、黒煙が立ち込めたり、窓が割れたり、その騒動ぶりをしょっちゅう目や耳にした。

元凶が誰なのかは、明々白々。

毎度お騒がせな、その研究室には、俺より一つ上の、秀才奇人の先輩がいて、文系の学生にも知れ渡っていた。

お目にかかったことはないが、噂によれば、日ごろの研究室の破壊ぶ

りからも分かる通り、多少の損害がでるのも辞さず、まっしぐらに実験を決行する過激な人らしい。

それでい、お咎めなしで、研究室から追いだされないのは、論文が世界的に高い評価を得ているからだ。

また学生ながら、名だたる企業に協力して、商品開発や売り上げに多大なる貢献しているとすれば、見返りに献金を受け取る大学は、けちのつけようがなかった。

なんて、大学内外で名が轟いている割に、顔は知られていなく、妖怪のように神出鬼没だから、そう会いたくても会えず。

レアカードがでたらラッキーと思うようなもので、俺らのような文系

の学生には縁遠い存在だったのが、欲をださないほうが、遭遇するこ
とがあつたり。

しかも、適切でないタイミングで。

次の授業に間に合いそうになく、大学の裏道を走っていたとき。
建物の壁を曲がったところで、直面したのが一見、バズーカ砲のよう
な大きな筒。

「へ」と声を上げる間もなく、バズーカ砲を肩に担ぎ、ゴーグルをか
けた人と目が合い、相手も驚いたようなものを、すかさず筒を下げた。
直後、爆発音が耳を劈き、辺り一帯、白い煙に包まれて。

